

NEWS RELEASE

株式会社 すららネット
2019年11月26日

無学年式 AI×アダプティブラーニング「すらら」を活用 努力する力・やり抜く力を評価する「すらら入試」全国で増加中

株式会社すららネット（本社：東京都千代田区 代表取締役社長：湯野川孝彦）が提供する AI×アダプティブラーニング「すらら」を活用した「すらら入試」が増加しています。2020年度入試にて、武蔵野大学附属千代田高等学院（所在地：東京都千代田区 校長：荒木貴之先生）が新たに「すらら入試」を導入し、当日のテストの点数で評価する入試ではなく努力する力・やり抜く力を評価する新たな入試スタイルが広がりを見せています。



学校法人 大多和学園
開星中学校・高等学校
学校法人 大多和学園 開星中学校・高等学校
(島根県松江市)



山本学園高等学校
(山形県山形市)



武蔵野大学附属千代田高等学院
(東京都千代田区)



学校法人 佐賀龍谷学園
龍谷高等学校 (佐賀県佐賀市)

「すらら入試」導入校

NEWS RELEASE

すららネットは、「教育に変革を、子どもたちに生きる力を。」を企業理念とし、アダプティブな対話式 ICT 教材「すらら」を、国内では 820 の塾、170 の学校に提供しています。

発達障がいや学習障がい、不登校、経済的困窮世帯を含む 69,000 人以上の生徒に学習の機会を提供するなど日本の教育課題の解決を図ることで成長を続け代表的な EdTech スタートアップ企業として 2017 年に東証マザーズに上場しました。

AI×アダプティブラーニング教材「すらら」は小学校 1 年生から高校 3 年生までの国語、算数／数学、英語の学習を、先生役のアニメーションキャラクターと一緒に、一人一人の理解度に合わせて進めることができるアダプティブな e-learning 教材です。レクチャー機能、ドリル機能、テスト機能により、一人一人の習熟度に応じて理解→定着→活用のサイクルを繰り返し、学習内容の定着をワンストップで実現できます。初めて学習する分野でも一人で学習を進めることができる特長を生かし、小・中・高校、学習塾をはじめ、放課後等デイサービス等においても活用が広がっています。

「すらら入試」とは、ICT 教材「すらら」を活用し、学校が指定する一定期間に課した学習課題への生徒の取り組み（プロセス）を評価する入試のしくみです。2015 年（2016 年 4 月入学者）に、島根県松江市の開星高等学校で初めて導入されました。「従来の入試は一発勝負であるため、その時点での学力の有無しか判定ができない。e ラーニングを活用することで、学習のプロセスを把握することができ、継続して努力することができるかどうかを測ることができる。高校受験に向けて何を勉強してよいか分からない生徒に、勉強の道筋をつけることができるとともに、一つひとつクリアしていくことで成功体験を身につけさせることができる。また、ICT を使って学習することに関心がある、一定の学力を持った生徒を取り込むことが期待される。」との観点から、従来の入試とは一線を画すものとして導入されたものです。

この斬新な入試方法が、「すらら」導入校を中心に広がっていき、佐賀県の龍谷高等学校、山形県の山本学園高等学校、そして、2020 年度には東京都の武蔵野大学附属千代田高等学院に導入されることとなりました。武蔵野大学附属千代田高等学院校長 荒木貴之先生は、「入試日だけで行われるペーパーテストでは、中学生が持続して学習に取り組む姿勢を評価することができなかった。長期に渡って e ラーニングをコントロールできる生徒は、必ず伸びていく。」と継続的な学習を通して、努力する力・やり抜く力を評価することのメリットを語っています。また、これまで地域で行われていなかった新しい入試方式が加わることにより、入学説明会での相談者数が昨年度比で 3.7 倍となっているとのことです。

経済産業省「未来の教室ビジョン」（2019 年 6 月発表）によると、（1）知識は EdTech で学んで効率的に獲得し、探究・プロジェクト型学習（PBL）に没頭する時間を捻出する（2）知識の習得は一律・一斉・一方向授業から「EdTech による自学自習と学び合い」へと重心を移行すると言及され、探求・プロジェクト型学習の重要性を説くと同時に、基礎学力習得における EdTech の活用が求められています。そのような中、「やり抜く力」を、未来の主力ツールである ICT 教材を活用して見極める「すらら入試」は、令和の時代にふさわしい新しい生徒募集の形となっていくことが期待されています。